



CFI ニュースレター C2023-10 「急がないで」

[今月の聖書]

「去れよ、去れよ、そこを出て、汚れたものに触るな。その中を出よ、主の器を担う者よ、おのれを清く保て。

あなた方は急いで出るに及ばない、また飛んで行くにも及ばない。主は、あなた方の前に行き、イスラエルの神はあなた方のしんがりとなられるからだ。」(イザヤ 52: 11、12)

「そこで、あなた方の歩き方によく注意して、賢くないもののようではなく、賢いもののように歩き、今の時を生かして用いなさい。むしろ、御霊に満たされて、詩と賛美と霊の歌とをもって語り合い、主に向かって心から賛美の歌を歌いなさい。」(エペソ 5: 15-19)

「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。捜すに時があり、失うのに時があり、保つに時があり、捨てる時があり、裂くに時があり、縫う時があり、黙るに時があり、語るに時があり、愛するに時があり、憎むに時があり、和らぐに時がある。」(伝道の書 3: 1.6-8)

「愛は寛容であり、愛は情深い。またねたむことをしない。愛は高ぶらない、誇らない、無作法をしない、自分の利益を求めない、いらだたない、恨みを抱かない。そして全てを忍び、全てを信じ、全てを望み、全てを耐える。愛はいつまでも絶えることがない。」(第一コリント 13: 4-8)

「熱心でうむことなく、霊に燃え、主に仕え、望みを抱いて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。あなた方はできる限り全ての人と平和に過ごしなさい。」(ローマ 12: 11 -18)

「昼は、もはや太陽があなたの光とならず、夜も月が輝いてあなたを照らさず、主がとこしえにあなたの光となり、あなたの神はあなたの栄えとなられる。あなたの太陽は再び没せず、あなたの月はかけることがない。主がとこしえにあなたの光となり、あなたの悲しみの日が終わるからである。」(イザヤ 60: 19.20)

お元気で過ごしてでしょうか。今月は「急がないで」と題して、私たちの生き方について、聖書の御言葉から導きを受けたいと思います。イザヤ書 52 章の背景には、いよいよ 70 年間のバビロンの捕囚生活から解放されて、祖国イスラエルに帰還する人々の喜びとざわめきが響いてきます。彼らは神に選ばれた選民でありました。まさに「聖者の行進」が始まろうとしているのです。しかし現実にはごく普通の人々であり、世俗的な楽しみを求める人々でした。いよいよ帰国するとなれば、バビロンの土産物をあさり、偶像の神殿の売店で思い出の品々を買おうとするのです。ですから「去れよ、そこを出て、汚れたものに触るな。」と命令されています。何十万人にもなる長い行列の先頭には、聖なる器を抱えて進む祭司たちがいました。ですから、「主の器を担う者よ、己を清く保て」と国民全体に語られるのです。

この「聖者の行進」は、信仰を持って生きようとするクリスチャンの人生にも似ています。日々の生活の中で、この世のもの、人、価値観から聖別された生き方が求められています。

出エジプトの時とは違い、この度は「急いで出るに及ばない、飛んで行くにも及ばない」と指示されています。これはきちんとして隊列を組んで、堂々と旅をしろという命令でした。さて、私たちは、日々の生活の中で、時間に追われて過ごすことがあります。これは、私自身にとっても大切なアドバイスです「慌てるな。焦るな。落ち着け。神の御言葉によって、一步一步歩け」と言われているように聞こえて参ります。

そこで、今月は信仰によって落ち着いて歩む生活を祈り求めましょう。そうするならば、日々神の守りのうちに歩むことができるでしょう。神の祝福がありますようにお祈りいたします。

(お知らせ)

*9月18日(月)大阪クリスチャンセンターにおける「喜びの歌を共に大阪集会」のためにお祈りくださり、ご協力下さいましたことを心から感謝いたします。300人のホールが満席となり、高らかな賛美が捧げられました。YouTubeで流されている毎週のメッセージの最後に少しその様子が紹介されています。

「喜びの歌を共に大阪集会の余韻」

9月18日敬老の日の祭日に、大阪クリスチャンセンターOCCホールに満堂の主を賛美する人々が集まりました。10時半に聖歌隊のリハーサルが始まった時、すでに80名を超えた兄弟姉妹が、初めて会ったにもかかわらず、いつも歌っている聖歌隊仲間のように和気あいあいと賛美の声をあげました。5月5日東京集会の演奏もされた田中恵子姉がピアノ、金森仁子姉がオルガン、ゲストの澤村康恵姉がクラリネット、そして主役である266名の歌う者たちが1時半に集いました。



新聖歌を歌うことはまさにイエス・キリストを歌うことです。約三時間の集会の中心に主イエス・キリストが立っておられました。120番「十字架より叫び聞こゆ」で「ゲッセマネの暗き夜のその祈り君知るや」と歌われたとき、皆、イエス・キリストの血潮の滴りを見ました。「木の上に釘打たれしその痛み君知るや」と歌ったとき、皆、我がための十字架であったことを感じました。224番「ああ驚くべきイエスの愛よ」はものすごい音量の賛美でした。この集いの中に臨在しておられたイエス・キリストの愛に皆驚き、感動しました。私は指揮をしながら涙が溢れて止めることができませんでした。

今年1月20日午前4時に夢から覚めた私が、日本の教会が崩壊していく有り様を見て、「主よ何か私のできる事はあるでしょうか」と祈ったことが、このような形で主を賛美する人たちの合唱となったことに私自身驚いています。

それによって主が始められ、主が導かれ、主が成し遂げてくださるのだという確信に満たされました。それは言葉を変えて言えば、主が日本の教会を顧み、これから新しいみわざを展開してくださるのだということに他なりません。

この働きのために密かに捧げてくださった方々、事務局を一手に引き受けてくださった音楽工房の田中勝利恵子夫妻、はじめはどのような内容であるかもつかめないにもかかわらず、協力してくださった委員の方々に心から感謝を申し上げます。

今年の東京と大阪における賛美の集いが、さらに広く展開される神の御業の種火となりますように祈るものです。皆様のお祈りを心から感謝申し上げます。 小田彰

彼はまた民と相談して、人々を任命し、聖なる飾りをつけて、軍勢の前に進ませ、主に向かって歌を歌い、かつ賛美させ、「主に感謝せよ、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」と言わせた。そして彼らが歌を歌い、賛美し始めた時、主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち破られた。(歴代下 20: 21 .22)

